

ある保育関係の雑誌で、「共感」についての特集にあたり、『共感』という著書（佐伯編『共感』ミネルヴァ書房、2007年）もある小生がインタビューを受けた。その冒頭で、インタビューはこんな質問をなげかけた。

「保育の中で共感という言葉はよく使われています。子どもが楽しんでいることに共感するというような感じで、保育者が子どもを理解する時の大事な姿勢として共感という言葉が使われることがよくあるように思うけど、子ども同士が共感するっていうのはどういうことなのかな、と改めて考えていたらわからなくなってきました。たとえば、楽しく一緒に滑り台を滑っている子どもたちがいるとして、そこでは同じ楽しさを味わっているんだけど、これって共感っていうことなんですか。」（『幼児の教育』第111巻第4号2012年10月 p.5）

残念ながら、そのときはこの問いにきちんと答えなくて、別の話（ただし無関係ではない）を持ち出してお茶をにごしてしまったのだが、ここであらためて説明しておこう。

他人の思いや感情に自分の思いや感情をのせるというのは、他者の思いや感情を自分の思いや感情と「同じ」とみなしているわけで、これは「同感（sympathy）」であって「共感」（empathy）ではない。

「共感」というのは、自分と他者はもともと違うという前提に立ちつつ、まずは相手が見ている世界を見る。

また、相手がやろうとすることの背後にあるその「やろうとする」ことの動機や理由について、相手の置かれている状況、それまでの経緯（いきさつ）なども踏まえて自らの中に取り込む。

「共感」は「あてはめて」いるのではなく、「わきおこってくる」ものであり、他者が表示している「欲求レベル」の感情や行動に「合わせている」のではない。我が国の教育には同感主義がはびこっている。

教師は「子どもの気持ちに寄り添う」ことが大切とされ、子どもは「教師の意図や思い」をいち早く察知してそれに応えることが望まれ、教室はすべて予定調和に、「ことなかれ」で進行することが「よい授業」とされる。

しかし、共感主義の立場に立つと、教師と子どもはもともと違うという前提に立つ。したがって、教師の意図がそのまま子どもに伝わるとは限らないとする。だから、子どもの「想定外」の意見や「質問」をおもしろがる。あるいは、

子どもが「合わせてくれている」ことの背後にある「本当の思い」を、なんとかして「感じ取る」ことに心を砕く。

教室で、「みんな」とか、「わたしたち」という言葉が、「みんな、わかってるよね」、「わたしたち、おなじだね」を暗黙の前提にはしていないか。いつのまにか、「同感し合うこと」（WE-ism）を押しつけていないか、これは一度、振り返ってみるべきではないだろうか。